

## 戦前・戦時期の日本毛織による羊毛代替繊維の追求

一人絹糸・スフから牛乳カゼイン再生蛋白繊維まで / 平野恭平 23 巻 1 号、25-44(2020 年)

1930 年代、羊毛や綿花の輸入の見通しが悪化する中で、それらを代替する繊維としてスフの利用が模索され、生産も大きく増加していき、戦時期に本格化した。この時期の傾向として、スフに取り組むことが当然であるかのように捉えられがちであるが、スフに対して慎重な姿勢をみせ、スフとは異なる可能性を追求しようとした日本毛織のような会社も存在した。本稿では、羊毛紡織業のリーディング・カンパニーである日本毛織の戦前・戦時期の化学繊維に対する取り組みを明らかにし、スフによる天然繊維代替の追求という通説的理解の下で等閑視されてきた多様な選択の可能性を示した。日本毛織は、安易にスフの工業生産に乗り出すことはなく、羊毛に近い繊維を得ることや、毛織物の品質を満たすことといった自らの存立基盤を重視し、原料調達の可能性を見据えて牛乳カゼイン再生蛋白繊維やエリ蚕を取り上げていた。日本毛織の考察を通じて、これまでの研究で手薄であった羊毛紡織企業の化学繊維に対する取り組みの一端を明らかにするとともに、化学繊維による天然繊維代替の追求の全体像を豊かにすることを目指した。なお、戦前から戦後にかけての日本毛織の化学繊維関係の史料は限られていたが、本稿では、偶然発見された、同社の化学系技術者がまとめた唯一の体系的な記録に依拠しつつ、神戸大学所蔵のニッケ資料で補足することにした。